法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-11

たかが部活動, されど部活動

西原, 美千代 / NISHIHARA, Michiyo

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
53
(開始ページ / Start Page)
78
(終了ページ / End Page)
80
(発行年 / Year)
1996-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019879

芝居とごはん

なかお　ひろ子

芝居の世界に足を踏み入れてから、もう何年になるのだろう。何がどう間違ってこの世界に迷いこんだのか、そのきっかけさえ忘れてしまう位の年月であることは確かだ。そして、今だにその中でぐるぐる迷い続けている事も不思議な現実である。

私は芝居の稽古が嫌いだ。稽古の開始日を知らされたその日から、私の人生は灰色の雲で閉ざされる。そしてその雲は千秋楽を終え打ち上げの乾杯のビールを飲み干す瞬間まで晴れることはない。何故それ程嫌いなのか。理由は簡単。私は人一倍おこられることが、嫌いだからだ。にも関わず、私は大根役者なので人の十倍演出家からおこられる。まさに毎日が地獄の日々である。いつも稽古の度に、この公演が終わったら二度と芝居なんかやら

たかが部活動、されど部活動

西原　美千代

北海道の高校教師（国語）になって二年目。男子バスケットボール部の顧問をしている。ずぶの素人なので断りたいのだが、生徒数二百人あまり、教師数十六人の郡部の小規模校ではしかたがない。

もう一人の顧問である男性教師も、私も、陸上競技ではインタハイ（高体連全国大会）の出場経験があるのだが、〝バスケットボールに命をかけて学校に来ている〟部員には「陸上じゃしようがねえよ。バスケットボール専門の先生に習いたいのになぁ」と愚痴をこぼされるだけの存在である。

「部活動をやるために教師になったのではない」と言いたいところだが、本校のように小さな学校では、部活動や学校行事での生徒とのふれあいが授業や学校生活を成り立たせる柱となる。専門ではないが、やらねばならぬ。

一回戦突破がこの数年来の目標なのだが、「勝ちたい」と言いながら部員は自分の時間や趣味を優先する。顧問も勝ちたいとは思っているが、礼儀やスポーツ精神、チームワークを身につけさせるのが先だと思うから、ついつい口うるさくなる。「部活動はしつけが八割、それができれば勝利は後からついて来る」と教えてくれた先輩の先生の言葉が忘れられないのである。

北海道の夏休みは短い。その大半を練習に費して大会に臨んだが、九十四対四十九で一回戦敗退。練習の積み重ねが快いシュートにつながればうれしいのだが、自己中心的で雑なプレーが多く、完全に走り負けした。

たかが部活動、されど部活動。冬の新人戦での一勝をめざしてまた体育館に向かう。何のかんのといってもメンコイ（かわいい）生徒達と時間を共有し、一人一人に目標を持たせながら思い出をつくっていくのが教師の役割であり、生き甲斐なのかもしれない。

（一九九四年卒・北海道訓子府高校教諭）

手書きの味

渡邊一郎

私は昨年の春大学を卒業して、ファミコン雑誌の記事を書いている。職業柄たくさんの文章を生産しているが、もの足りなく感じることも多い。最近その原因に、やっと気付いた。じつは、ワープロで文を打つ事にひどく慣れないのだ。私がワープロを使い始めたのは、仕事をはじめてから。キーボードを叩いて記事を作り、それでお金をもらっても、いまいちピンとこない。苦労はするのだが、汗をかいた感じがしないのだ。原稿用紙に何回も消しゴムをかけながらマス目を埋めていく達成感・充実感が、そこにはない。

こんな事を考えていたら、勝又先生と卒論の書き方について議論したのを思い出した。先生は、手書き以外の原稿を卒論として認めないと断言した。それまでに論文めいたものを執筆した経験から、私は必死に反対した。それには、ワープロを使用する場合より3倍の手間がかかるからだ。結局は、反発もむなしくゼミの全員が手書きの論文を提出した。

しかし、今になって考えると、先生がなぜ手書きの原稿以外を認めなかったかよく解る。前日まで清書に追われ、ものを握るのもままならない手で卒論を提出した瞬間に起こる、大きなタメ息。そのあと数日間続く、モノを考えられない状態。あれこそが、ひとつの表現を成し終えた後の達成感と空虚感ではないだろうか。きっと我々にも、疲労と恍惚からくる放心状態を味わわせたかったに違いない。

最近では布施英利氏が、最新刊「電脳版文章読本」のなかで「かつて写真の登場が絵画に革命を起こしたのと同様、ワープロの登場が文章の革命となる」と述べていた。私も同感であり、新しい文章の認識に移向する必要を要求されている。なにも文筆業に限ってのことではない。社会に生きる全ての人に改革が迫られている。しかし、だ。移向していく前に、今までの文章の在り方を知るのは、新たな文章の書き方を認識する手がかりになる。

余裕があれば、卒論は手書きの方がいい。

（一九九五年卒・出版社「キャラメル・ママ」勤務）

初仕事

和田康友

国文学会会員のみなさん、初めまして。保坂さんの後を引き継いで昨年の九月からこちらで役員として働かせてもらっております和田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。この仕事をさせてもらって以来、先生方を始め会員の方々、職場の先輩方にいろいろとお世話になり、またご迷惑をおかけしており、誠に申し訳なく思っております。

仕事に就くと早速「秋のバスツアー」のお手伝いという大仕事が三週間後に控えておりました。それまでが研修期間のようなものでしたので、実質上このツアーのお手伝いをすることが「初仕事」と言うことになるでしょうか。今回の旅行では高草茂先生が館長をされている山梨の「青春白樺美術館」を訪ね、帰りは葡萄狩りを楽しむことを予定としていたのですが、あいにくの大雨のために進行が大幅に遅れてしまい、結局後者の方は見送ら